

学生の意識・行動変容からみた スタディツアーの評価

岩 下 康 子

The Evaluation of Study Tour Based on Students' Behavior Modification

Yasuko Iwashita

1 はじめに

今日私たちをとりまくグローバルな社会においては、外国との関係は今までになく密接になり、異なる宗教や言語、生活様式などを理解し受容していく姿勢が強く求められている。平成24年より、新しい外国人在留管理制度がスタートし、その台帳制度に基づくと日本全体では、中長期在留者及び特別永住者を合計した約212万人ともいわれる在留外国人が在住し、そのうち広島市には1万6千人もの人々が暮らしている(法務省入国管理局, 2015)。約8割がアジア圏からの移民で、韓国、中国、次いで、フィリピン、ベトナムといった新興国からの技能実習生やEPA(経済連携協定)によって渡日した労働者が増えていることがわかる。新興国の間では今後も日本企業の進出が進み、日本語熱も高く、留学生も増えていくだろうと考えられる(旗手, 2014)。

一方、日本の若者の海外志向が薄れ、「内向き化」しているという報告がOECD(Organization for Economic Co-operation and Development)、文部科学省をはじめとする統計によって取り上げられ、その対応策が議論的となっている(OECD, 2013)。海外留学阻害要因を取り除く行政や教育機関の継続的な努力が必要であることは言うまでもないが、一方で、留学そのものの定義や留学方法についても言及する必要がある(太田, 2014)。小林(2010)によると、国際的な留学の定義は存在せず、日本の教育機関が留学生として学内外で広報しているものとOECDが統計として出している留学生では、定義が異なっている。現在の国際情勢の急激な変化によって、定義自体が変化せざるを得ないと小林は述べている。日本学生支援機構が毎年高等教育機関を通じて行っている調査によれば、教育機関同士の協定に基づかない短期留学はむしろ増加傾向にあり、その中には、海外研修の形態を含み、単位認定のない留学や学生が直接留学エージェントを通して行っている留学も含ま

れている。広島文教女子大学（以下本学）でも、学生が直接エージェントを通して行う留学は増加傾向にあり、学生の留学に対する要望が多様化していることが分かる。

本稿では、正課外活動として、2015年4月より2年間に渡って実施した「フィリピンスタディツアー」において、参加者の学びをどう創出するのか、その内容と学生の意識と行動変容を中心に論じていく。本スタディツアーは、高橋産業経済研究財団より、「フィリピンとの架け橋を築く」に関する研究実践と題して実施した。参加学生の意識・行動変容の考察は、Kirkpatrick（2006）の4レベルアプローチを用い、特にスタディツアーの成果として着目するレベル3の行動変容を考察する。

2 スタディツアーとは

スタディツアーについては、学術的な研究はいまだ少ない。実施団体の情報交換や協力を促進し、開発協力で寄与することを目的で1997年に発足したスタディツアー研究会は、「スタディツアーとは、国際協力・交流市民団体（NGO）などが相互理解や体験学習を目的として行うツアー」と定義し、観光のみの旅行とは異なり「現地事情や、NGOの活動などを学習できる」「現地の団体や人々と、同じ目の高さで交流できる」「参加者自ら、プログラムに参加、協力できる」（スタディツアー研究会、2016）。という特徴をもつとしている。さらに、藤原（2014）は、「事前学習や振り返り、現地での体験を通して学びの共有や振り返りがなされることによって、自己の実存的な内容とそのプロセスをともなうツアーであり、それによって、他者及び自他の地域への貢献、還元が生じ、グローバル社会の課題と展望と支え合いを生み出していく教育活動である。」と述べている。

現在、国際協力を携わるNGO団体は400以上もあるといわれており、そのうちの半数以上がスタディツアーなどの体験活動を実施している（外務省国際協力民間援助連携室、『NGO データブック』、2016）。プログラムの多くは、1週間から2週間程度の日程で組まれており、前後の移動日を除いた数日を体験学習と観光とに分けている。これらは、観光というマストツーリズムが生み出した、環境破壊、売春、犯罪、といった社会問題に対してのオルタナティブツーリズムとして成立してきた。エコツーリズムやエスニックツーリズムともいわれるが、コミュニティ中心思考、地域資源の活用、体験参加者の地域融合政策、自然の保護、などの特徴を持ち、専門家をよんでの学習会や活動も取り入れ、相互作用による新たな価値を生み出すことを視野に入れている。しかしながら、全国から応募してくる参加者一人ひとりの動機は様々で、必ずしもNGO活動の主旨に共感しているとは言えず、相互の意思疎通が取りにくい中で、事前事後の学習会も設定できないことが多い（スタディツアー研究会、2016）。渡辺（2001）が述べているスタディツアーに必要な4

つの契機, ①参画性, ②状況性, ③関係性, ④連結性のうち, ③と④の設定が NGO 主催の活動では設定することが難しいと言わざるを得ない。

一方, 大学が実施している海外体験学習については, 名称も様々で実施形態も多様化している。各大学で共通する状況を「スタディツアー研究会」が報告するところによると, ①海外でのツアーを実施するにあたり, 全学的な理解が少なく, 組織的な位置づけが不十分である。②安全管理体制が不十分である。③評価が定まっていない。④体験や活動の評価が定まっていない。⑤教員と職員が対等な立場で参加し, 考える機会が少ない。という多くの課題が挙げられている。その中で, 2003年に生まれた大学教育における「海外体験学習」研究会は, それぞれが独自で行ってきた実践事例を報告し, 組織体制や教育効果について意見交換を行い, 一部ではカリキュラムとして実施するまでに至っている。そして, 近年, 学士教育の一環として, またグローバル人材の育成の一助として海外体験学習が位置づけられるようになったことを示している。大学などの教育機関が行う海外研修・スタディツアーは, 参加者の活動を学びにつなげていくことが求められているといえる。また, このツアーを通して, 参加者の学びの変容をはかる評価基準の整備が重要課題となっている。

実体験を振り返り, それを概念化し, 新たな行動計画を立て, それがまた次の学びのための体験になる。経験したことがそのまま学習体験になるのではなく, 振り返りと概念化のプロセスを通して主体的な実践につなげることによって学習となる (Tylor, 2000)。海外研修が効果的な教育体験となりうるためには, 明確な目標設定と学習理論に基づいて構成, 実践された場合にのみ効果を上げることができるといふ理念に基づいて本研究は実施された。

3 研究の目的と概要

本スタディツアーの研究目的の一つは, 開発途上国を訪問して格差問題や貧困問題などの現状を視察し, 現地の人々と双方向的な交流を通して, 学生自身の新たな価値観の創出や共感を伴う知識の形成を目指すことである。さらに, 学生自身がツアーにおいて課題を設定する過程時と事後の課題達成度から, 学生の意識と行動変容を観察し, 教育効果を検証することを目指している。

スタディツアーの目的地がなぜフィリピンなのか。理由は3つ挙げられる。1つは, アジアの中では英語を使用する頻度の高い国であること。(世界第3位の英語人口) 2つ目に, 経済成長の目覚ましい発展とそれに加え, フィリピンから日本への移民の増加が今後も見込まれること。彼らの就業スタイルの一つに, 出稼ぎが定着しており, 少子化対策が進まない日本にとって, 順調な人口増加を続けるフィリピンは羨望の労働力を持った国である。3つ目に, 一部の地域を除けば, 外国人の安全が比較的保たれることが挙げられる。日本と比較して安全な途上国を世界に探

すことは困難である。学生の安全確保を最優先に考慮した際、セブ島は犯罪率も低く、観光客を大事にする政府の方針が浸透していることを下見で確認した。本人が注意を払った行動をとっていれば危険事態に巻き込まれることは少ないことと、命を脅かすような感染症や伝染病がないこともあげられる。

2014年より学科有志で取り組んできた国際協力活動が、「現地に行って実際の状況を見て、自分たちにできることを現場の目線で考える」という体験型プログラムを企画するまでに発展した。スタディツアーの全体構成は、目標設定と地域貢献の理念を組み入れた事前事後の学習（8コマに当たる事前学習と2コマの事後学習）、現地スタディツアー（1週間）で成り立つ。正課外活動であるため、現地ツアーは、正課授業に支障のない長期休暇中に実施し、第1回（2015年9月8日～14日）が10名、第2回（2016年2月19日～24日）が5名、第3回（2016年8月26日～9月1日）11名で計26名の学生が参加した。

学生の変容を考察するにあたり、参加者の事前事後レポート、および Kirkpatrick の4段階モデルをもとに作成した記述式アンケート、さらにツアー2か月後、筆者との面談記録を用いて行う。さらに6か月後、追跡調査として、筆者のゼミ生を中心に面談アプローチを行う。

4 4 レベルアプローチ

1959年、Kirkpatrick が提唱した4段階モデルは、教育評価を4つの段階、レベル1 (Reaction)、レベル2 (Learning)、レベル3 (Behavior)、レベル4 (Results) に分類し、各レベルでの評価を包括的に行うことができるとその形式と手順を説明している。人材開発の教育活動を把握し、その効果を明らかにする評価法は、多くの組織に必要とされているが、その中でも、4レベルアプローチは研修効果を把握するのにスタンダードな指標として定評がある。レベル1では、参加者の満足度を評価し、終了後のアンケート調査などによって行う。レベル2では、参加者の理解度を確認し、ツアーに参加したことで、知識やスキルなどが実質的に向上したかどうかを評価する。レベル3では、ツアー終了後一定期間を置いて、参加者に具体的な意識及び行動変容が見られるかどうかを評価する。レベル4では、ツアーに参加したことによる実際の、具体的な変化が参加者の実生活の中で、所属する組織やコミュニティにどのような利益、あるいはインパクトをもたらしているかを評価する。

このアプローチを利用することによって、参加学生に生じる意識・行動変容をツアー前後の記述式アンケートを用いてレベル1、2を分析し、ツアー後の一定期間を経た追跡調査としてレベル3では、振り返りシートとツアー後の面談によって評価を行い、今後の課題を提示したい。

4-1 レベル1

参加学生の満足度調査は、4件法を用いてアンケートに答える形で実施した。ツアーに参加してよかったと思うかについて、100%の学生が参加してよかったと回答している。また、プログラム内容については、NGO活動の満足度は、1回目が70%、2回目、3回目では100%となっている。これは、1回目がフィリピン人によって運営されているNGO団体と連携したことによる価値観の違いから生じている。現地のスタッフは、日本からやってきた遠客に、できるだけ安全で快適な活動場所を用意し、その上 手土産を授けるような形で活動拠点を見学させてくれた。つまり、深刻な貧困地域をさげ、事前学習で触れていたようなスラム街ではなく、市街から離れた農村地での活動となり、のどかな様子に学生は物足りなさを感じてしまったことが分かった。プログラムを構成した筆者と現地ホストとの意思疎通が不十分であったことも満足度を下げたことに起因する。そこで、2回目以降は、セブ島で長く地域開発活動、教育支援、日本語教育普及に取り組んでいる日本のNGO団体に依頼し、常態的に支援活動を行っている地域の訪問と支援活動への参加を実施した。最貧困地域といわれているエリアやごみ山を訪れ、貧富のギャップは学生の価値観を揺さぶるほどの衝撃であったが、だからこそ満足度が高かったといえる。

大学訪問プログラムの満足度は、「やや満足している」を含めると3回とも100%に達する。「やや満足している」学生の声を拾うと、次の2点にまとめられる。一つは、「自分の語学力が足りなくてコミュニケーションが取れなかった」ことによる不完全燃焼の気持ち。2つ目は、「学生との交流時間が短かった」というものであった。訪問側であるこちらの都合で日程を組んであるため、全てのコマ数をこちらの都合に合わせることはできず、半日スケジュールを2日にわたって構成した。学生がより高次の交流を求めることについては、好ましい姿勢であり、燦る気持ちが次回海外渡航時へのステップにつながると期待している。

4-2 レベル2

Kirkpatrick (2006) は、「ラーニングの測定は、どんな知識が身につき、どんなスキルが獲得され、どのように態度が変化したか」という3項目を提示し、3項目のうち1つ以上の検証を前提として評価することを述べている。ここでは、知識やスキルの向上を求めたツアーではないため、課題達成度によって、態度変化に関する自己評価を行った。

事前学習時に各自が設定したスタディツアーの課題は、以下の内容になる。一人の学生が1、2の課題をそれぞれ一つずつ持ち、3については現地にいったから学生から提示されたものである。

(資料1) 設定したスタディツアーの課題

1. 教育	<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育の実施状況と日本との比較 ・高等教育の視察と英語教育の現状
2. 国際協力・援助	<ul style="list-style-type: none"> ・ストリートチルドレンの現状と課題 ・支援する側の視点と受ける側の要望 ・NGO 活動全般について
3. 環境衛生	<ul style="list-style-type: none"> ・インフラ整備状況 ・子どもたちの生育環境と将来への展望

上記の課題は、参画性の評価に反映し、課題レポートとして提出させた。そして、ツアー全体を学びの変容4契機の観点から4段階評価で実施した。

(資料2) 学びの変容の4契機と基準

参画性	1	自分の課題を持ち、課題解決のために自ら調べ、質問し、話し合った。
状況性	2	活動を通して、自分の中にある価値観と葛藤する場面に遭遇し、葛藤を解決する努力をした。
	3	新たな発見や思いがけない出来事に受容的な態度で接した。
関係性	4	ツアーの仲間との絆、現地の方との絆を深めることができた。
	5	NGO スタッフ、現地の子どもたち、大学生と積極的に関わることができた。
連結性	6	現地で見つけた課題の中で、日本でもできることを見出した。
	7	現地の課題の中で、日本の課題にも共通しているものを見出した。
	8	帰国後、ツアーの経験を活かすことができる。

(資料3) 達成度の評価

評価	参画性1	状況性2	状況性3	関係性4	関係性5	連結性6	連結性7	連結性8
A	16	18	14	22	18	12	6	12
B	10	8	7	4	8	11	8	7
C	0	0	5	0	0	3	12	5
未記入								2

A: 予想以上に十分達成した B: 達成した C: 達成できなかった

参加者26名の達成度を資料から考察すると、参画性100%、状況性95%、関係性100%、連結性54%で、スタディツアーにおける学びが非常に高い到達度を示して

いることがわかる。活動への意欲付けが十分に行われた上で実施した結果であり、現地での新しい出会いと強力なインパクトを持つ体験、毎日の反省会によるフィードバックなどが影響していると思われる。ただ、連結性に関しては、約1週間の滞在で、フィリピンの課題を日本のそれに置き換えて考察することはハードルが高く、今後の課題であることが面接時に判明した。知識やスキルのような理解度を問う活動ではないため、客観的な視点に欠けていることは否めないが、学生たちの意識の中に有意な変化があったことは確かである。

4-3 レベル3

参加者への追跡調査及び分析は、ツアー参加後から約2か月後に、アンケートと面談によって行った。

(資料4) 学生の追跡調査結果

1. スタディツアーで学んだことを誰かに報告、伝達しましたか。
26名全員が報告、伝達した。(100%)
2. スタディツアーで学んだことから、関心をもって取り組んでいることがありますか。
英語コミュニケーション 23名 (88%) 地域の国際イベントへの参加 16名 (62%) 時事問題 3名 (12%) 開発教育 3名 (12%)
3. 長期 (半年)、フィリピンに留学・インターンシップする機会があれば行きますか。
・行く 12名 (46%) ・行かない 8名 (31%) ・わからない 6名 (23%)
4. 上記で、行かないと答えた人の理由は何ですか。(複数回答)
・衛生面が気になるから 6名 (23%) ・食事が合わないから 5名 (19%) ・治安が心配だから 2名 (8%) ・町の中の匂いが合わないから 2名 (8%) ・長期は自信がないから 1名 (4%)
5. スタディツアー後、変化したことがあれば記述してください。(複数回答)
・海外渡航へのハードルが低くなり、自信がついた。12名 (46%) ・外国人とのコミュニケーション活動に積極的になった。7名 (27%) ・もう少し長期間で海外に行く計画を立てている。7名 (27%) ・途上国を支援して行きたいという新しい目標ができた。6名 (23%) ・SNSで現在もフィリピンの方々と繋がっている。5名 (19%) ・親・周囲の人に感謝の気持ちをもって接するまたは、伝えた。3名 (11%) ・本当の支援とは何かについて考えるようになった。2名 (8%)

スタディツアーの帰国報告会は、事後学習として設定されていたため、全員の学

生が興味をもって取り組んできた課題についてプレゼンテーションを行った。引率している中では分からなかった様々な体験や思いが伝わってくる報告会となった。個別に、SNSでの発信、イベント（オープンキャンパスなど）でも発表する機会を持つ学生も多く、ツアーに参加できなかった学生に、現地情報を伝えようとする意欲が十分にあった。

ツアー後に関心を持つようになったことの筆頭は、大学でも専門として学んでいる「英語コミュニケーション」(88%)である。これまでも学習の中心であったが、コミュニケーション手段としての英語の面白さを実感したことが、学習への動機づけになっていると思われる。また、自分の英語コミュニケーション能力では相手に伝わらない場面があったことに気づかされたことが、英語学習へのモチベーションとなっている。期待通りの結果であるが、大学構内で英語をコミュニケーション手段として使用する頻度が限定されており、その場を設定することに苦勞しているという意見もあった。そこで、何人かが目を向けているのは、地域で行われる国際交流イベントへの参加である。市内で開催される留学生まつりや国際交流・協力の日、ENGLISH CAFÉへの参加、その他外国人との交流会などが定期的に開催されており、多くの学生が足を運んでいる。時事に関しては、現地の学生から聞かれたことに答えられなかった反省から、意識を向けるようになったと記述があった。開発教育については、教育専攻の学生からによる。

スタディツアー後の変化は、参加した学生たちがもともと国際的志向を持っていたということに影響を受けていると思われるが、積極的に国際交流に関わろうとしている意見が多く、ツアーの成果として前向きに評価できる。

さらに、半年後、参加者の実生活上で、スタディツアーで受けた感動や発見、振り返りから具体的な「インパクト」がもたらされたかどうかを追跡した。2か月後の調査で前向きな行動変容が多くの学生に見られているが、その後一定期間を置いた調査によって、学生が経験をどのように日常生活や地域社会の中で生かし、活動しているかということをもとに4名の学生からのインタビューをもとに記述する。

Aさん(2015年9月参加)：半年後の春休みに、単身セブ島を訪問し、日本語ボランティア活動に従事。2度の渡航が契機となり、卒業論文では、フィリピン・ストリートチルドレンを題材に「開発途上国に関わる教育」について研究している。卒業後は、教育現場で開発教育に関わりたいという意欲を持っている。

Bさん(2015年9月参加)：グローバル人材育成教育学会で、途上国の実情と課題について体験発表した。卒業論文では、日本に増え続けているフィリピン人の女性労働者について焦点を当て、労働環境と課題を提案している。

Cさん(2015年9月参加)：グローバル人材育成教育学会で、貧困の問題と学力について体験発表をした。その後、身近に行われている国際イベントに多数参加し、

外国人の友人関係を構築している。半年後の春休みに、大学プログラムでオーストラリアのクイーンズランド工科大学に語学留学した。セブ島に行ったことが留学するモチベーションになったと話している。

Dさん（2016年8月参加）：グローバル人材育成教育学会で、日本とフィリピンを比較し、教育格差に言及した体験発表を行った。フェアトレードに興味を持ち、現在、学内にフェアトレードを行うサークルを立ち上げるための準備をしている。

5 ま と め

2年間に渡って実施したフィリピンスタディツアーは、学生自身が現地に赴き、地域の人々と共に活動することで日常生活の中では経験できない直接体験を伴う異文化理解と受容を促進した。また、活動を通して変容していく学生の成長を調査、観察することで、活動の教育効果を検証し、教育内容へのフィードバックと新たな教育プログラム構築の提案への第一歩となった。本稿では、4レベルアプローチを用いて検証した結果、学生の行動変容が期待した以上に得られたことがわかった。

ただ体験のみを重要視して、体験こそが国際的な感覚を養うのに必要な要素であるとするのは、危険であることは言うまでもない。体験を目的とするのではなく、体験することの意味や事前事後の過程に教育的意義を置き、体験を通して、それらの学びを実践するという方法をとる必要がある。3回にわたって実施してきたこのツアーは、正課外活動という性質上、学生間、引率者—学生間の日程調整が困難であり、要ともいえる事前事後の学習に時間を割くのは非常に厳しい状況が何度もあった。それでも、相互の連携を取りながら、全員が課題に取り組んでこられたのは、何より学生自身の中にある大きなモチベーションがあったことに起因する。

Taylor（2000）は、「経験したこと自体が学習体験になるのではなく、振り返りと概念化のプロセスを通して主体的な実践につなげることによって学習が成立する」と述べている。事前事後をあわせて10コマに相当する学びの時間が、他者及び地域への貢献と還元につながり、学びの変容4契機を促進する教育活動につながったと考える。グローバル人材の育成において大学ができる取り組みは、たとえ短期海外研修であっても、前後のプログラムを充実させ、長期視野に立って構成することにより、海外経験を活かすことができるという、一つの提案でもある。

参加した26名全員が、このツアーに参加してよかったこと、そして、報告会に積極的に参加し、全員がこのツアーを人に薦めたいといっていることが何より大きな成果である。ツアーの引率者、およびファシリテーターとして、全行程に関わってきた筆者としては、当初から自らが主体的に学ぶ課題解決型能動的学習、いわゆる「アクティブラーニング」を脳裏の片隅において構成に当たってきた。結果として、筆者の予想をはるかに超えて、①学生が能動的に参加し、事前学習での自己課題設

定とコミュニケーションスキルのレベルアップに取り組んだ、②自己の設定した目標課題を自律的に遂行した、③今回の評価で、学生が一定の行動変容を示している、という成果は、まさにアクティブラーニングの目指す姿ではないだろうかと振り返っている。同時に、より高次の能動的学習をどう組み立てるのか、経験を積んだ学生の次のステップはどのようなのか、カリキュラム上での実施をどう提案していくのかなど、今後取り組んでいくべき課題は多い。

まずは、レベル4の評価に向け、参加学生の意識・行動変容の観察を継続して追究し、どのような活動や事前学習や体験がその変容を生起させたのか、事後にどのような活動を仕組むことがより効果的な情動変化をもたらすのか、要因を深く探っていくことで、自立した学習者を育てていくことを責務とする。また、この取り組みを土台にして、より高次のアクティブラーニングを提案することも課題である。

謝 辞

フィリピンスタディツアーの実施に当たっては、高橋産業経済研究財団より2年に渡って助成を賜り、学生と共にセブ島での経験を積むことができました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、研究に関わってご助言いただいた学科の先生方、および統括部の職員の方々、協力してくれた学生の皆さんに心より感謝いたします。

引用・参考文献

- [1] 太田浩 (2014) 「日本人学生の内向き志向に関する一考察—既存のデータによる国際志向性再考—」, 『留学交流』, 7月号, Vol. 40, <http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/index.html> (2016年12月20日入手)。
- [2] 大滝修, 津山直樹, 森茂岳雄, 橋崎頼子 (2014) 「相互交流を通じた多様な変容の実践的分析」, 『国際理解教育』, Vol. 20, pp. 61-65。
- [3] 経済協力開発機構 (OECD) (2013) 「『図表で見る教育 OECD INDICATORS (2013年版)』」, 明石書店。
- [4] Kirkpatrick, D. L. and Kirkpatrick, J. L. (2006) *Evaluating training programs* (3rd ed.). Berrett-Koehler Publishers, Inc.
- [5] 開発教育協会 (2001) 「つながられ開発教育—学校と地域のパートナーシップ事例集」, 『開発教育協会発行』, 第1部, 第2部。
- [6] 外務省国際協力民間援助連携室 (2016) 『国際協力と NGO 外務省と日本の NGO パートナーシップ』, 外務省。
- [7] 外務省国際協力局民間援助連携室 (2016) 『NGO データブック2016数字で見る日本の NGO』, 外務省。

- [8] 北林晴美, 福井美穂, 駒田千晶 (2014) 「開発途上国スタディツアー実施報告」, 『お茶の水女子大学紀要』, 第5号, pp. 58-64。
- [9] 小池源吾, 志々田まなみ (2004) 「成人の学習と意識変容」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第三部 第53号, pp. 11-19。
- [10] 柴原智代 (2008) 「日本語国際センターの研修評価システムに関する提案」, 『国際交流基金 日本語教育紀要』, 第4号, pp. 87-101。
- [11] 鈴木克明 (2015) 「評価の4段階を用いた逆三角形研修設計モデルの提案」, 『教育システム情報学会』, 第40回全国大会, pp. 63-64。
- [12] スタディツアー研究会 (2016) 『実践的！スタディツアー学～NGO スタディツアーの考え方と作り方～』, スタディツアー研究会。
- [13] Tylor, Kathleen, Catherine Marienau, and Morris Fiddler. (2000) *Developing Adult Learners: Strategies for Teachers and Trainers.*, Jossey-Bass.
- [14] 高橋優子 (2008) 「スタディツアーの教育的意義と課題～JICAカンボジア事務所での経験に基づいて～」, 『筑波学院大学紀要』, 第3集, pp. 149-158。
- [15] 中川友康 (2015) 『英語はアジアで学ぶ時代がきた！フィリピン留学』, 宝島社。
- [16] 中矢礼美, 梅村尚子 (2013) 「海外体験学習における学びの質的变化を促すコンピテンシー評価の有効性」, 『広島大学国際センター紀要』, pp. 15-28。
- [17] 旗手明 (2014) 『なぜ今、移民問題か—外国人労働者政策の大転換か』, 藤原書店, pp. 100-110。
- [18] 藤原孝章, 栗山丈弘 (2014) 「スタディツアーにおけるプログラムづくり—『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換」, 『国際理解教育』, Vol. 20, pp. 42-50。
- [19] 藤原孝章 (2016) 「海外体験学習におけるルーブリックの活用—タイスタディツアーにおける学びの評価—」, 『留学交流』, 8月号, Vol. 65, pp. 25-30, <http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/index.html> (2016年12月20日入手)。
- [20] 法務省入国管理局 (2015) 「平成27年度版出入国管理第一部 出入国管理をめぐる近年の状況」, <http://www.moj.go.jp/content/001166752.pdf> (2016年12月20日入手)。
- [21] 宮島喬 (2014) 『なぜ今、移民問題か—移民政策の現在と未来』, 藤原書店, pp. 46-67。
- [22] 山中信幸 (2014) 「意識変容の学習としての開発教育」, 『国際理解教育』, Vol. 20, pp. 13-23。
- [23] 米原あき (2015) 「研修評価における『行動変容』への視点：『4レベルアプローチを手掛かりに』」, 『国立教育政策研究所紀要』, 第143集, pp. 209-129。
- [24] 渡辺恵 (2001) 「国際協力市民組織における人材育成に関する事例研究—NGO

スタディツアー参加者の学習プロセスの分析―], 『筑波大学大学院博士課程
教育学研究科教育学研究収録』, 第25集, pp. 11-21。

—平成29年1月20日 受理—